

遠い海

講談社版

と　　う
遠　い　海



KODANSHA

© 安岡伸好 一九六一

昭和三十六年一月二十五日 第一刷発行

二七〇円

著　　者　　安　岡　伸　好

発　行　者　東京都文京区音羽町三ノ一九
野　間　省　一

印　刷　所　東京都文京区大塚坂下町一一四
豊国印刷株式会社

発　行　所　株式会社　講　談　社

振　替　東　京　三　九　三　〇
電話大塚(四四)大代表三一一一

(製本 文信社)

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

遠
い
海

題字 裝幀
直木 菅野
久蓉 惠介

先客かな？ 打水の淡く残つている沓脱の上に、草臥れた黒靴が一足、行儀よく置かれてあつた。

上月は身構えなおすように長身を揺らした。それを見て、とつさになにかを判じようとしてゐる自分に氣付いたからである。剃りあとの青い骨張つた顔に硬い翳がうごいた。いけない。今日はちがう。この家はおれと同じ島人しまつちやの家だ、と思つた。それに、今日の結果に、おれは帰郷を賭けているんだ。そんな軽卒な判じものなどしないほうがいい。この半歳、彼は履歴書を懷中にして、何軒か見ず知らずの家を訪ね歩いてきている。そしてその都度、彼が受けねばならなかつたものは、不得要領な誇大な同情と、後になつてそれと判るほどの礼儀にみちた拒絶であつた。いつしか彼は、なにかちよつとしたことで、その日の訪問の吉凶を判じようとするような氣持に侵されていたのである。今日はしかし、そうした心の動きを、彼は膝頭を小さく揺すりながら落着きなく戒めた。丸田は同じ奄美人だ。少くとも、あの好奇心にみちた、いや

らしい同情だけは受けないですむ。それに……。

出てきた中年の主婦は典型的な島の女の顔であつた。上月は心がしぜんと島言葉で包まれていく誘惑を覚えたが、要領ぶかく普通語で来意を述べ、奄美出身者であることはおわりにちよつと付加えるだけにとどめた。なぜかその理由は判然としなかつたが、初対面の人に島言葉でものを言うのは、失礼な感じがしてくると同時に危険な感じがしたからである。しかし、

「ハキー、ナーメモシマムンナ、アケツ、サッシシム、アッシェミンカアランソー。ナーメルヌヤマトッチュジャソー」

主婦は障子の陰で、深い眼窩から長い睫毛をしばたいたいて、そう言つた。

上月が島人には見えないというのだ。主婦の人懐っこい大袈裟な表情を浴びると、彼はだしなく含羞みながら、どこか苛立たしく足を踏みかえた。

通された応接室には先客が背中を見せて立っていた。うす暗い六畳の洋間に、一見して素人眼にも夜店物と判るひどい骨董品？　が、こぼれ落ちそうにびつしりと飾りたててあつた。窓は三方とも閉めきられ、その上にも掛軸がぶら下げてある。日当りの悪い部屋から、妙な日向臭いにおいが鼻をついてきた。上月は、なんとなく困つたものにぶつかつたような気がして、戸惑つた。幽かな不安が胸に揺れた。同じ島人とは知つていても、それはただそれだけのことで、彼はまだ丸田に一面識もないのである。

「やあ、暑いですねえ、どうも……」

本棚につめこんである雑多な人形をいじつていた先客が、ふり向いてチラッと上月を見上げた。上月は会釈して、そつと椅子に腰を下ろした。先客はうす笑いをうかべてすぐに馴々しく話しかけてきた。

「あんたも、これでしよう？」

指先でひらひらと履歴書をいれた封筒を振った。立つたまま続けて、柄沢利作、二十七歳、独身、広島大学卒だ、と自己紹介をしてきた。そして、教育庁の部長の紹介状持参だと、それを誇らしげに履歴書の上に重ねてみせるのだつた。

上月は一瞬疑わしげな眼になつた。反射的にビクッとした声を胸のなかで吞み落した。(広島……?) 彼は急いで視線を散らし、簡単な経歴を述べて柄沢の言葉に応えた。

「ではあんたは校長と同郷であるのを頼りになさつて来られたんですね、なるほどねえ、そうですね、それも藩閥以来いまだに根強く続いている一つの仕官の道のようにですね」

柄沢は感嘆しているのか軽侮しているのか判らない口調で言いながら、上月の前に腰を下ろした。

「教育庁の紹介のほうか、はるかに効果的なことは、ぼくも知つていますが……」

「いやいや、とんでもない。そんなことは判りませんよ、あんた。日本じや、まだまだおらが国意識がお盛んですからねえ。大臣が新聞発表になるときの、写真の下を見てごらんさいよ。まず出身地、それから学歴、職業、年齢といった順じやないですか。大丈夫ですよ、それ

はまだまだ日本じや有力な仕官の道ですよ」

と言つて柄沢は、重い瞼の下から人の心を見透してなぶるような眼で、ひたひたに猫のような皺をよせて晒つた。上月は柄沢のどこか女性的な軀の動きから、くねつた競争意識が、じわつと絡み付いてくるような気がしてひたいの汗を拭つた。実は、いまさつき君の靴を見てぼくは今日の訪問の吉凶を判じようとしていたんだよ、と心のなかで言つた。深い靄の中を彷徨つているうち、自身、靄になつてしまひそうな不安が、遮二無二彼をあの学校へ自分を賭けてみようと決意させたのだつたが、それをなんと表現したらよいものか彼には判らなかつた。

「あの学校に、ぼくは、親しいものを感じるような状態にあるんです。校長が同郷なのは偶然だつたんですよ」と、上月は言つた。

「ほう、あんた、あの学校をご存知なんですか」柄沢はすこし驚いたように言つた。

「いえ、別に……」

上月は周章で、口籠つた。別に彼はしかと学校の内容を知っているわけではなかつた。いわば彼のそれは、漠たる期待とも憧憬ともつかぬ、親近感のようなものであつた。問詰められれば、それは彼の一人合点のものかもしれない。が、それでも彼はいま自分をそこに賭けようとしているのだつた。

柄沢は押搦われたとでも思つたのか、むつとした顔で椅子から立上り、再び本棚の人形を華奢な白い指先でもてあそびはじめた。しばらくして、言つた。

「……だが、こんな怪しげなガラクタを、こうも臆面もなくびつしりと竝べたてるなんて、チェッ、なにかヘンに圧倒されて意味ありげに見えるじやないですか。どうでしょう？」
上月はその忌々しげな誘いの言葉に、要領ぶかく苦笑を返した。柄沢の口は初対面の上月に、ずけずけと馴々しく饒舌だったのが、その声には、底のほうで空とぼけて相手をじつと見張っているものがあるような気がしたからであつた。

扉の外で、いきなり丸田の声らしきものがした。家人になにかの注意を与えているようすであつた。上月は椅子の中で背筋を立てた。

「やあ、今日はすこし暑いようだねえ」

丸田は五十代前半の働き者らしい無造作な挨拶で、猪首を振りながら入ってきた。柄沢は周囲のガラクタを鑑賞していた風を装つて、わざとゆつくりと席に引返した。柄沢がなにか言う
と、

「いやあ、夜店のガラクタだよ、君、みんな」

と言つて、丸田は満足そうに笑つた。眼鏡をはずして、二人の履歴書を眺めたが、それは詳しく読んでゐる風ではなかつた。柄沢が重ねて差出した「部長の紹介状」は、封筒のままその名を一瞥しただけであつた。すると、柄沢はすぐに重い瞼の下からやや上気した眼で丸田をまつすぐに凝視め、告発するような調子で、地方の教育界の無氣力を述べるのであつた。

「……先生のお人柄は、学校の先輩である部長からよくお聞きしました。どうぞ、宜敷くお願

いたします」

いままで相手になつて喋つていた傍の上月など、眼中にないような殊勝な態度であつた。

が、丸田は聞いているのか、いないのか、ただ話が終るのをゆつくりと待つてゐる風にも見えた。飴色縁の眼鏡の奥からは、つかみどころのない、あつぽたい微笑がたえず漂つてゐた。無造作に誰彼の区別なく人を受け容れることのできる眼であつたが、それは同時にどこか無責任なものを感じさせた。

島人の面影はきれいに洗い落されて、その翳さえ見えなかつた。短く刈りこんだ半白の髪の下は、つるつると血色よくひどく健康な食慾を思わせた。

「……しかし、普通の学校だったら、ぼくは教員になろうという気持にはならなかつたと思ひます」

上月はそこで、またはたと口籠つた。どうも、うまく言えそうになかつた。率直に言えば、彼は教員が嫌いなのである。教員の持つ、卑屈で傲慢な雰囲気、彼は前からたまらなく嫌いなのだ。学生時代一時彼は学校に残つて勉強を続けたいと思つたことがあつたが、研究室から結局は殆んどが教員になつていくコースを考えると、鬱陶しくなつてその考えを捨てたことがあつた。卒業後、東亜研究所などという中途半端なところに彼が勤めたのも、そのためであつた。この半歳職を求めて歩いた間も、一度も教員になろうとは思わなかつた。いく軒か訪ね歩いてゐるうちに、彼はしだいに職を求める気持から、自分の生きる場所を求めたい心變つて

きたのだ。そして、あの学校に、なにか自分の行くべき道を見出だしたような、あるいは見出だし得るようなものを感じたのであつた。日本の敗戦によつて、朝鮮人は祖国を恢復し、上月は故郷を失つた。それはまさきり逆の現象であつたが、彼はそこになにか強い一つのものを感じたのだ。奄美人であれば、それはしぜんに判るはずだし、奄美人が朝鮮人学校の校長をしていると聞いた時、逆に上月はハッとした思いでそれに気付いたのであつた。が、いま彼はそれを順序だてて、丸田に縷々と説明しなければならぬのだらうか？ 上月は、島人の面影のまつたかない丸田の顔に、幽かな恨みが湧いてくるのを覚えた。彼自身も、先刻丸田の妻に島人には見えないと、妙な感嘆の声を浴びたのであつたが。

「という、君は、うちの学校がどういう学校であるか、よく承知しておるといふわけですね？」

と、丸田は、猪首をちよつと傾げて言つた。上月は、警戒気味な興味を浮かべたその視線に、戸惑つた。

「いえ、は、はい。朝鮮人が朝鮮人になるための学校だと、知人から聞いております。が、知つてゐるのは、それだけです」

言つて上月は、おれにとつては現在それだけで充分なのだ、と思つた。だが、彼はそう言い足すかわりに、意味もなく顔を赧らめた。丸田の視線が、生徒のお喋りを聞きおわつたあとの教師のように、どこか人を小馬鹿にした鷹揚さで崩れていつたからである。丸田は突然上月を

驚かすような大きな笑いを笑うと、うすい半白の口髭のあたりを、手の平でばつばつと払い、待つていたように言い慣れた口調で言つた。

「なるほど、成程、ははゝゝ、それでよいのです。あらゆる意味においてたいへん政治的な難しい学校ですが、君たちはそう難しくは考へんほうがよろしいでしょう。いや、若し、学校の内外に渦巻く政治的な雰囲気に乗じて言動なさるようだったら、採用ははつきりとお断りしますよ。うちの学校は各方面に微妙な関係を持っておりますので、学校経営は目先の理窟だけでは仲々うまくいかない事が多いのです。たとえば、自分で良いと思い、他から見ても当然だと思われるようなことでも、まつたく意外な結果を招く惧れが常に潜在しているんです。はゝゝ、とにかく難しいたいへんな学校をぼくは背負わされておるんですよ。しかし、それだけにまた張合いのある大仕事でもあるわけなんですがね」

「政治的と申しますと、いつたい、どんな……？」

柄沢が丸田の豪傑笑いをかいくぐるようにして重い臉の下を耀やかせた。

「うん？ それは、そのなんですすよ、君」と、丸田は愉しげに舌を鳴らしてから言つた。「つまり、どんな簡単なことでも、えらく面倒くさいものになつていくことですな。いま、上月君が朝鮮人が朝鮮人になる学校と仰有つたようだが、普通なら、なるほど言いつくし得て妙と申上げたいところだ。が、どつこいこの簡単な言葉が君、実際には仲々大変なことなのですよ。とにかく、教育の根底におかれるべき、理想像としての朝鮮人を、彼らは解放された民

族として、これから自分たちの手で作つていこうとするところなんですからね。しかも、現実の朝鮮は世界最強の国によつて、二つに引裂かれておる。だから、現在のところ、それは端的に言つて教育問題である前に、彼らにとつては差迫つた政治問題なんだ。とくに南北間で戦争が勃發した現在は、その感が一そう強いわけです。したがつて、ちやうど上月君の言葉が抽象的で現実においてはなんら意味をなさないと同様に、日本の教育基本法にあるような、人類普遍的な教育概念など、うちの学校では空気みたいなものとしてしか受けとられませんよ、ははは。だが断つておくが、ぼくがほんきでそんな事を言つたとしたら、ぼくは忽ち賊になるんですよ、君、だつて君、ぼくは、都立でしかも実際には閣議の決定を経て設立されておる、それだけに種々複雑な政治的意味合いを持たされている学校の、校長というれつきとした日本の教育公務員なんですからね。が、だからといつて、日本の教育三法に遵つて、朝鮮人をいくら立派な日本人として教育しようとしたつて、そんなことは今日では全然意味をなしませんし、第一彼らがそんなものを受付けるわけがありません。いや、まあ、まったく厄介なものですよ、政治という奴は。誤解と偏見の渦で、簡単なことでもえらく面倒なものにしてしまふんですな、そ奴が。ぼくは實際そのために毎日頭を痛めておるんです」

だが、丸田は頭を痛めているとか思い悩むものを背負わされている風には、まったく見えなかつた。むしろ愉しげな昂揚した気分の中に彼はいるようであつた。彼は時々ひとりで大きく笑つたが、そこには人生を腹で渡つてきた人間の、子供っぽい自信と、挫折を知らない楽天主

義が漲っているようであつた。

「いや、お二人ともたいへん難しいお顔になつたようだが、一般の先生方はそんなに難しく考
えると却つてよくない。みなさんはただ、ぼくの学校経営を虚心に信じてお勤め下さればよい
のだ。それに、これは参考までにちよつと申上げておくが、朝鮮人相手にまともに取組むもん
じやありませんよ。二重帳簿といつてはなんだが、まあそういった芝居心がないと……心の余
裕といつてもよいが」

丸田のしだいに大胆にくだけていく話振りは、なんとなく落胆しかけていた上月に希望をも
たせはじめた。二人共採用されそうな気がしてきたのだ。彼はまだまだ続きそうな丸田の話
に、背筋を立てて緊張しながら、目を瞠つていた。

2

上月と丸田の妻が鳥言葉で話合っているのを、傍に立つて軽蔑したような妬ましの眼で眺
めて待つていた柄沢は、外へ出ると、再び自分の顔をとり返したようににげずけと饒舌になつ
た。しかし、上月は柄沢の口から丸田の悪口を聞いてみてもしようがなかつた。彼は早くこの
男から離れたかつた。

「……あの校長は狸ですよ。ぼくは欠員は中学のほうの英語が一人だと聞いていたのに、肝心

その話にはちつとも触れずに大臣気取りの演説をぶつてゐるんですからね。煙にまかれて安心しちやいられませんよ、あんた。……尤もぼくは部長からもう一と押しさせてみようと思つていますがね」

上月は柄沢から眼をそらして、口を吸つた。そうか、この男はおれに競争を断念させようと思つて、先程からくねくねと腐心してゐたんだな。と思つた。しかし、いやな相手ではあるが、もしもこの男と一つの席を争うことになるのだつたら、おれは争おうと、上月は長い脛を遠慮なく運びながら考えるのであつた。柄沢は駅へ着くと、ズボンのポケットから皺苦茶になつた知人の住所を書いた紙片をとり出して、そこへ行く乗物の具合を上月に訊ねた。そして鉛筆でそれを書きとめると、顔を上げあたりを見廻して言うのだつた。

「東京は広くて、あらゆる欲望が充満してゐるようで、いいですねえ。ぼくは現在の広島で暮してゐるのは、辛いですよ。それでいままで勤めていた中学をやめて上京してきたわけなんです」

「えッ？ どうして広島で暮すのが……？」

「いや、なに、それはお話しても、あんたには解りませんよ。ではまた……。欠員はこんどきりというもんじやありませんから、もし駄目でもがっかりすることはありませんよ。またすぐに機会がありますよ」

と、最後まで人を喰つた慰め顔で、柄沢は駅の階段を上つていつた。

人の神経を攪乱してはどこかでニヤリとしているような柄沢の声と、上月はようやく別れることができた。彼は柄沢の躰からにおい付いたものを拭い落すように、手巾で長い首筋の汗を拭いとつた。賭を賭けおわつた後のようなものが心にひろがつていた。それはやや放棄的な自堕落な気分でもあつた。しかし、そこには一本のトゲが上を向いてぼつんと残されているのに彼は気付いていた。

線路沿いの道を次の駅まで歩きだしながら、上月はしだいに空洞となつていく胸の中で重いつぶやきを呟きはじめていた……。あの男は、おれと同じに広島で傷ついたのだろうか。広島で暮すのはぼくには辛いんだ、といつていた。その理由は話しても人には解らない、といつていた。……あの男は、おれと同じにあそこで自分を喪つたのだろうか。おれと同じに自分を知つたのだろうか。おれはさつき、おれもそこにいたんだと、あやうく叫びだしそうであつた。あの男が妙な晒いを残して階段を上つていつたとき、背後から手をさし伸べて、ともにあの《自分》を語り、なぐさめ、はげまし合ひたかつた。……いや、そうではない。そんなことは思つてみるだけで、出来ないことだ。おれは誰にむかつてもおそこを口にすることはできない……。

上月がそこで直面したものは、原爆と同時に、自分の怖ろしさであつたのだ。それは原爆そのもののへの恐怖の中へ解消されて然るべきものだ、と、上月はいくどか自己脱却に努めたのだったが、彼が直面した自分の影はいまも肌に生きており、それはまるで第二の皮膚とでもなつたように、いくら拭いとうとしても拭いとれるものでなかつたのだ。その影は、彼の肌の下